

宮崎汎会員が見た世界の旅第3部歴史編第4話

最後の晚餐の場面 イスラエル

イタリアの商業都市ミラノには、戦禍をくぐりぬけ奇跡的に守られたレオナルドダヴィンチの傑作「最後の晚餐」がある。サンタ・マリア・デッレ・グラツィエ修道院の食堂に壁画として描かれたものである。はじめて名画を目にしたのは1978年秋である。その瞬間は思わず息をのんだ。痛みの激しい壁画は長い年月をかけ修復を重ね1999年ようやく終了した。

これまで様々な画家が、“最後の晚餐”を題材に取り上げ描いている。

ダヴィンチの最後の晚餐はユダの位置がほかの絵とは異なり、キリストの一言によって、使徒たちの驚きが絵を見ている私たちにも伝わってくるような気がする。



1985年修復作業中のレオナルドダヴィンチの最後の晚餐

1985年に訪れたときは

女性が一人懸命な表情で修復作業を行っていた。壁画の前にはやぐらが組んであり、当時は薄明りの中での見学であったが、色合いもぼんやりとしていたが修復後は色彩も汚れを落とし美しい色合いで明るい画面になったと人伝手に聞いている。(1985年)

時を経て2019年にイスラエルの聖地エルサレムを訪れる機会があった。

エルサレムはキリスト教・ユダヤ教・イスラム教の聖地として知られているが、イスラエルとパレスティナの間では今に至るも紛争の火種がくすぶり続けている。訪れる日本人観光客がゼロだった年もあるが2019年当時は小康状態で年間2万人が訪れている。

エルサレム旧市街にあるシオンの丘には、古代イスラエル王として40年間も君臨したダビデ王の墓がある。思いのほかささやかな墓であるが、ユダヤ教信者の熱心な祈りが絶えることはない。この建物の2階のがらんとした殺風景な広間が、実際にイエスキリストが弟子の12使徒と最後の晩餐をとった場所だといわれている。



エルサレムにある最後の晩餐が行われた広間